

亡くなった全教区民のためのミサ

皆さんは、長崎市の伊王島にある馬込教会をご存知でしょうか。あるいは西海市の大島にある太田尾教会をご存知でしょうか。橋が架かる前、島から島へと私が赴任した教会です。長崎教区には全部で71の小教区があります。新聞のお悔やみ欄を見ると、よく教会でお葬式があげられています。ただ、関わりがある教会でなければ、亡くなった人のことを気に留めることはないでしょう。

今日は、全教区民のためのミサとしてこのミサがささげられています。私たちが、機会を設けて教区のどこかで亡くなった方のことを思い、祈るのには理由があります。亡くなられた方はすべて、たくさんの祈りを必要としているからです。身近な人から祈られるだけでなく、遠く離れている人、一度も会ったことのない人からも、祈ってもらふ必要があるからです。

大神学校時代に、恩人のための手紙を書くという務めがあり、本当に見たこともない海外の支援者のために手紙を書いていた。私が手紙を書いていた人は記憶が間違っていなければ、ドイツに住んでおられる方でした。その方は日本で司祭職を目指す学生を支援し、祈りによって支えることを引き受けてくれている人でした。私はその人の顔を知りませんが、同じようにその恩人も、私のことをほとんど知らないのに、卒業するまで支援し、祈ってくれていました。知っている人の祈りだけでは、私は祭壇に上っていません。

自分が知っている人のために祈ることは、そう難しくありません。しかし知らない人のために祈ることは、寛大な心がなければできないことです。皆さんは連休のさなか、いわば中途半端な時間を割いて、こうして教区内で亡くなったすべての方のために祈りをささげてください。本当に有難いことです。名前も知らない人のためにささげた祈りですが、神様は必要などころにうまく届けて、行き渡らせてくださいます。はっきり誰かのため、何かのためと意識していない祈りも、神様は決して無駄にはなさないのです。

亡くなった人の中で、もし誰からも祈ってもらえない人がいるとしたらどうでしょうか？そんなとき、亡くなったすべての教区民のためにささげた祈りが、神様によって届けられるのだと思います。「あなたを知らない人から、今日祈りがあなたに届いた。私はそれを伝えるために来た。」誰からも知られず、誰からも祈られずに旅立った人がいたとしても、神様は決して見捨てません。そしてその時のために、私たちの「顔も名前も知らない、亡くなったすべての教区民のためにささげた祈り」が役に立つのではないのでしょうか。

船外機が故障して、周りに島が一切見えない沖まで流されたことがあるという先輩司祭の話聞いたことがあります。まだ携帯電話が存在しなかった時代だそうです。その先輩は場合によっては、行方不明のまま、誰からも知られずに旅立つ危険もあったと思います。

私たちにも、そばに誰も居ないときに息を引き取る危険はあり得ます。こうして定期的に、亡くなったすべての教区民のためにミサをささげ、祈るならば、どんな状態で旅立った人がいたとしても、その人にも祈りが届き、ミサの恵みが届くはずで。続けて、すべての司教司祭、奉獻生活者、信徒のためにこのミサの中で祈ることにいたしましょう。